《研究ノート》

上海（シャンハイ）報告 ――李光洙（イ・グァンス）の上海――

波田野　節子

平成六年度の正月休暇を利用して、上海を訪れた。主たる目的は、朝鮮近代の作家李光洙（1892～1950）が上海で過ごした場所を調査し、現在の状態を確認することである。本稿では李光洙の二回の上海滞在について簡単にまとめ、あわせて旅行の報告をおこないたい。

一　第一次滞在（一九一三年十一月末～一九一四年一月初）

1

一九一三年末、二十二歳の李光洙は大陸放浪の旅に出た。彼は東京の明治学院中等部留学中にすでに幾つかの作品を発表していたが、一九一〇年の春の卒業とともに故郷定州の五山学校に赴任し、その夏、日韓併合をむかえたあとは学校業務に専心していた。しかし過重な校務と心の通わぬ妻との家庭生活に疲れた彼は、やがて大陸放浪の夢にとらわれた。これには当時の朝鮮の社会的雰囲気も関係していたようである。のちに「朝鮮日報」に連載した自伝的小説『彼の自叙伝』の中で、李光洙は、主人公の口を借りて次のように述べている。

「実際、この時代に放浪の旅に出る人間は、私だけではなかった。K学校を通過して行った人だけでも十人あま

りになっただろう。彼らはたいていソウルでさまざまな運動に従事していた名士で、亡命の途につくところだった。みな古びた衣服を着て麻の履をはき、悲壮な表情をたたえてゆく悲憤慷慨の人々だった。

このころこんなふうに朝鮮を離れて放浪の旅にでた人が、数千名にはなったことだろう。彼らが行くところは、たいてい南北満州かシベリアだった。どこに何をしに行くのかと言われても、即座に明確に答えることはできないのに、それでも胸の底には何かはっきりした目的があるような気もする、そんな旅だった。それも時代思潮だといおうか、こんなふうに放浪の旅に出ることが、なにか栄光のように思われたのであった。」(1)

併合後の朝鮮では、きびしい武断統治がしかれていた。政治活動にたずさわっていた人々は身の危険を避けて亡命していき、また多くの青年たちは憂国の情にたえかねて故国を出ていった。五山での生活に行きづまりを感じていた李光洙をつきうごかしたのは、周囲のこのような雰囲気でもあったと思われる。

2

一九一三年十一月のなかごろ五山を離れた李光洙は北に向かい、新義州を通って中国の安東についた。そこで偶然、知り合いの鄭寅普（1892～？）に出会って、中学時代の友人たちが上海に滞在していることを知り、勧められるまま安東から船に乗って上海に向かう。船は営口、大連、青島を経由し、十一月末のある朝、揚子江から黄浦江に入っていった。黄浦江の埠頭に泊まっている多くの船の真中に「傲慢そうに」そびえるアメリカ、イギリス、フランスの軍艦が、まず李光洙の目に入る。つづいて彼の目に映ったのは黄浦灘、昔はバンド、今は外灘と呼ばれている黄浦江沿岸地区に、自国の権威をきそうように並んでいるヨーロッパ各国の銀行の建物だった。

「中国大国の財政を心のままに操る滙豊銀行、（中略）国は小さいが金は多いことで有名な白耳義銀行、その他

どの国の銀行もこの地に支店の一つも出さないところはないということだ。（中略）この銀行の嘴が四百州津々浦々いたるところで、中国の鉱山だ鉄道だといって、四億のだらしない中国人の膏血を際限なくすすっているのだと思うと寒気がし、（中略）破産と滅亡に瀕している老大国の状況にやはり涙が浮かんだ。」(2)

一年後に「青春」誌に発表した紀行文『上海から』の中で、李光洙はこう書いている。

中国はこのころ、辛亥革命で清が倒れて中華民国が成立したばかりだった。革命後の混乱のなかで、安全と仕事を求める中国人たちが租界に大量に流入し、上海は急激に膨脹して一九一四年には人口がはじめて百万を突破している。そのうち外国人は二万二千人ほどで、うち日本人が半数以上を占めていた。

上海が外国に対してひらかれたのは、中国が半植民地に転落するきっかけとなったアヘン戦争によってである。一八四二年の南京条約で定められた五つの開港地に上海も入っていた。上海が開港されると、イギリス人たちは以前からあった「県城」の北側の黄浦江沿岸に租界地をつくった。それはやがて英米の共同租界となって岸から内陸へとのびていったが、船の着く外灘（ワイタン）はつねに租界の表玄関であり、そこには李光洙が驚いたように各国の出先機関である建造物が、威容をほこるように林立していた。このころ日本人たちは、共同租界の北を流れる蘇州河の向こう側の虹口（ホンキュー）に日本人地区をつくりはじめ、また、これまで共同租界の南にあって「県城」とのあいだに挟まれるように小さかったフランス租界は、西方へむかって急激に拡大して、しゃれた高級住宅街を形成しつつあった。

李光洙の友人たちが住んでいたのはこのフランス租界である。そこに向かう途中で見た警察官の衣服は、東洋人としての李光洙のプライドを傷つけた。共同租界では印度人巡査がターバンを巻いた民族衣装で交通整理にあたり、フランス租界に入るとベトナム人巡査がやはり特徴のある帽子をかぶって民族的な恰好をしている。写真が絵葉書になるほど有名で、当時の上海名物のひとつであったこの情景に、国を失ったばかりの李光洙の目は征服者の傲慢

を見た。『上海から』の中で李光洙は、これは西洋人が東洋人にたいして「自分たちの威風をもって奴僕にあやしからん恰好をさせて笑い物にする」行為であり、「哀れな人種をひとつの興味ある骨董品として愛玩する」[3]ものだと怒りをあらわにしている。

李光洙の友人、洪命憙（ホン・ミョンヒ）、（1888〜1968）文一平（ムン・イルピョン）、（1888〜1939）たちの住居は、フランス租界のなかの中国人集合住宅街で「白爾部路」という通りの22番地にあった。洪命憙は中学時代の李光洙にさまざまな本を貸しあたえて、文学に目を開かせてくれた先輩である。東京でバイロンの「カイン」に心酔して假人（カイン）と号した彼はこのころオスカーワイルドに夢中で、二階にとじこもって「ジュリアン・グレイの肖像」を読んでいた。李光洙と明治学院で同窓だった文一平は、一日中部屋のなかを歩きまわり、ときおり大声で悲憤慷慨調の演説をはじめたり詩を吟ずるという生活を送っており、他の住人は彼を狂人と呼んでいた。この家には洪命憙と文一平のほかに三人の若者が住んでいたが、そのうち趙素昂（チョ・ソアン）（1887〜？）は新しい宗教をおこすのだと言ってコーランに没頭していた。

この趙素昂は三・一運動のあと上海の臨時政府樹立に参加し、政治家として解放後まで活躍することになる。文一平はのちに歴史学者になり、洪命憙は有名な歴史長編「林巨正」を「朝鮮日報」に十年以上にわたって連載して、解放後には北朝鮮で副首相までつとめた。また安東で李光洙に偶然あって上海行きを勧めたあの鄭寅普も、のちに高名な歴史学者になっている。彼らのうち解放まえに亡くなった文一平をのぞき、李光洙と趙素昂そして鄭寅普の三人は、朝鮮動乱のさなかに北朝鮮に連行されて死亡することになる。そのころ北朝鮮側の高位にあった洪命憙は、危篤状態におちいった李光洙からの伝言をうけて駆けつけ、手厚く看護したというエピソードが伝わっている。

将来このように数奇な運命をたどることになる彼らだが、このころは皆二十代の青年であり、日本に国を奪われたやり場のない悲しみと鬱積した心情をこんなふうに異国でまぎらわせているのであった。「軍資金」は底をつき

かけていた。あまりの貧窮生活に、李光洙は転がり込んだことを後悔するほどであった。家には帽子が二つしかなく、おまけに外套もないので、近くの「フランス公園」を散歩するくらいしか外出することができなかったと、李光洙は回想している。一週間に一度ほど趙素昂といっしょに「フランス公園」に散歩にいき、西洋人の子供たちを遊ばせている中国人の子守女を見たりした。

ときには、やはり亡命者である申圭植（シン・キュシク）（1879～1922）の家にいって食べさせてもらうこともあった。彼は愛国啓蒙期からの独立運動家で、自宅は朝鮮人のための中国語と英語の講習所になっており、多くの人々が出入りしていた。「一九一三年頃睨観（申圭植の号）宅は上海のみならず江南一帯の朝鮮人亡命客の本拠だった」[4]と李光洙は回想している。ここで李光洙はさまざまな人物に出会った。五山学校を経由して先に亡命していた申采浩（シン・チェホ）（1880～1936）ともここで再会した。のちに無政府主義者となって「朝鮮革命宣言」を書き、最後は獄中で亡くなったこの人物を、李光洙は敬愛していた。

3

李光洙が一カ月滞在した上海をあとにしたのは、一九一四年一月三日のことである。申圭植にサンフランシスコの同胞新聞の主筆をやるよう誘われて承諾した彼は、まずウラジオストックまで船で行き、そこからシベリア鉄道に乗ってヨーロッパ経由で米国に向かうつもりだった。だがこの旅は結局、旅費の不足と第一次世界大戦勃発のために、バイカル湖手前のチタで中断する。

八月末に五山に戻った李光洙は、『上海から』と『海参威に』[5]の二つの紀行文を書いた。上海滞在の一年後に発表されたこの二つの紀行文には、国を失って放浪する作者のやるせない心情が滲みでているが、それとともに随所

で目につくのが、西洋に対する賛嘆と反感のいりまじった複雑な感情である。十一歳のとき孤児になった李光洙は、東学の師から文明の話しを聞いて目を輝かせ、やがて上京して火輪船や汽車に目をみはり、つづいて日本に留学して明治末の開化した東京を見た。そしてこの上海でついに文明のおおもとたる西洋と出会ったのである。しかしながら李光洙がはじめて出会ったこの西洋は、東洋侵略の先端基地として作られた疑似西洋であった。その建造物に目を見張り、文明の素晴らしさに感嘆はしても、その文明のもつ力が自分たち東洋人の搾取のために使われているのを目の当たりにするとき、賛嘆の念が反感に転ずるのも当然であろう。三十年以上もたって書かれた自伝『わが告白』の中でも、李光洙は、上海で感じたのは「西勢東漸」の深刻さであったと述懐している。上海で目撃した西洋による東洋侵略の惨状が、李光洙に大きな刻印を残したことがうかがわれる。

五山にもどって一年後、みずからの知識の不足を痛感した李光洙はふたたび留学して東京の早稲田大学に入った。そして一九一六年の末には、朝鮮で最初の近代小説といわれる長編『無情』を書き始める。

二　第二次滞在（一九一九年二月～一九二一年三月）

1

最初の上海滞在については先述の二つの紀行文のほか、『彼の自敍傳』をはじめあちこちで語っている李光洙だが、二度目の滞在については植民地時代には多くを語っていない。これには滞在の性質がかかわっている。最初の放浪と違って、二度目の上海行きのとき李光洙はすでに文名が高まっていたし、目的も完全な政治亡命であった。日本統治下の朝鮮における検閲の問題や、万が一他人におよぼすかも知れぬ迷惑のことを思えば、この時期のこと

をみだりに書くわけにいかなかったことは容易に推察される。植民地時代に書かれた文章は、すでに死去した人物の思い出や簡単な回想にとどまっている。だが解放後の一九四八年、対日協力者の処罰を目的とする反民族行為特別調査委員会の発足をまえにして、みずからの民族意識と民族のための行動を述べた自伝『わが告白』のなかで、李光洙はかなり克明にこの時代のできごとを回想している。

2

一九一八年十一月、第一次大戦が終結してウィルソンの民族自決原則が発表されると、朝鮮では独立の気運が高まった。李光洙はこのとき、のちに再婚する許英粛（ホ・ヨンスク）（朝鮮で最初の女医である）と北京に駆け落ちしたところだったが、大戦終結とパリ講和会議の報を聞いてただちに東京にもどった。翌一九一九年初頭、東京の朝鮮人留学生たちは朝鮮青年独立団を結成して独立宣誓文を発表することを決め、李光洙がその起草をひきうけた。この宣言文は二月八日に神田のキリスト教青年会館で読みあげられて、本国の三・一運動の導火線の役割を果たすことになるが、李光洙はその直前に、みずから起草した宣言文とその英訳をもって神戸から上海行きの船に乗っていた。日本の警察が独立運動の情報を国内でおさえることを恐れた留学生たちは、この事実を海外に知らせるために、彼を上海に送り出したのである。このとき李光洙は二十七歳だった。

上海に着いた李光洙はすぐに宣言文の英訳と二・八蜂起の記事を「チャイナ・プレス」社と「ノース・チャイナ・ディリー・ニュース」社にもちこんだ。両社はすぐにではなく、自社の通信員の知らせを確認してから記事を出してくれた。これで李光洙の使命は果たされたわけである。だが、まもなく本国で独立運動をおこすという知らせが届き、彼は上海で前年結成されていた新韓青年党の人々とともに、フランス租界の「霞飛路」に事務所をおいて本

国の動きにそなえた。

三月五日ころ三・一蜂起の第一報が電信で届き、上海の新聞に載った。李光洙たちの最初の仕事は海外の同胞やパリ講和会議等に電報を打つことと、上海の新聞社に本国の情報を提供することだった。朝鮮で独立宣言が発表され全国民がたちあがったという内容の電文を、パリ講和会議、アメリカのウィルソン、英国のロイドチャーチ、フランスのクレマンソー宛てに打ち、「当時の自分たちには法外な大金だった」[6]七百数十元という料金を支払って仲間といっしょに電報局を出たときの爽快さを、李光洙は回想している。

日がたつにつれ、安東県を経由して本国の消息がぞくぞくと伝わってきた。下着の中や靴の底に隠しもってきたと思われるしわくちゃの紙に細かい字でぎっしりと書きこまれているのは、どこで何人が集まり太極旗をふって万歳(セー)を叫び、何人がどのように日本警察に殺されたか、というような情報の数々だった。こうした情報をこのあと李光洙は自分が主任をつとめた臨時政府の資料編纂委員会で編纂した。この資料を最初に利用したのが、翌年『朝鮮独立運動の血史』を刊行した朴殷植(パク・ウンシク)である。

必死の思いで届けられたこうした情報を英文や中国文に訳して新聞社にもちこんでも、「チャイナ・プレス」や「ディリー・ニュース」は条件をみたしていないといって載せてくれず、逆に中国の新聞は針小棒大に書きたてて李光洙たちを赤面させた。たまりかねた彼らは「チャイナ・プレス」紙の記者をソウルに送り込み、その記者が上海に帰ってきてから、ようやく日本の残虐行為が紙上に載ることになった。朝鮮に取材にいってくれた「チャイナ・プレス」の記者に、感謝の意をこめて李光洙たちは洋食で接待した。だが朝鮮の惨状を見てきたばかりの記者は、彼らに次のように悲観的なことを言ったという。

「あれだけやれば、君たちの民族が日本の統治に不服で独立を願っているという意思と、独立のためには死も恐

れないという勇気も伝わったのだから、これ以上同胞を煽動して犠牲を出すのはやめたまえ。この数十年間でつちかった知識階級を全部犠牲にすれば、また数十年間すぎるまであれほどの人間を育てることはできないのだから、これからは教育と産業で独立の実力をやしないなさい。私の見るところでは現在の君たちの力では日本を追い出して独立する力はない。」(7)

一九四八年の『わが告白』で回想されている言葉である。だがしかし、三〇年前の記者の言葉を、李光洙は本当にそのまま記憶していたのだろうか。この言葉はむしろ、三年前まで続いていた日本統治下での自分自身の心情ではなかったのか。それを記者に代弁させているように思われてならない。

3

三・一のあと、上海には海外にいた亡命客があつまってきた。四月十日には、李光洙と新韓青年党が準備した「金神父路」にあるフランス家屋（この日のために大枚三百元の家賃を払って借りうけておいたものだと、李光洙は回想している）で、第一回臨時議政院会議が開かれ、二十四時間の激論のすえ翌十一日午前十時に李承晩（イ・スンマン）を国務総理、安昌浩（アン・チャンホ）を内務総長とする大韓民国臨時政府が成立した。成立したといっても国務総理も内務総長もまだ上海に来ていない状態であった。

五月に安昌浩（アン・チャンホ）（1878～1938）が上海に着いた。彼はやがて李光洙の精神的指導者となるが、このとき到着するなり入院してしまい、李光洙が見舞いに行ったのが最初の出会いだったという。安昌浩が内務総長に就任すると、政庁は、以前閔永翊の住宅だったという「霞飛路」の大きな家に移った。この政庁で李光洙は臨時政府の機関紙『独立』（のち「独立新聞」と改称）の編集局長として記事を書き、資料編纂委員会の主任として三・一運動に関する

資料をまとめ、また大韓民国を建設するにあたっての国家綱領ともいうべき「独立運動方略」を安昌浩が作成するのを手伝った。

李光洙はこの「独立運動方略」を、「当面した独立運動工作をおこないながら、民力を培養し、民心をまとめ、独立戦争の準備をしようというのが島山（安昌浩の号……引用者）の独立運動方略の要領だった。」[8]と説明している。「方略」の基礎になっているのは、安昌浩が愛国啓蒙運動の時代から提唱していた、実力を養成しつつ独立の準備をしようという、いわゆる準備論である。日韓併合のあとアメリカに亡命した安昌浩は、一九一三年にこの思想を実行するための団体「興士団（フンサダン）」を創立し、在米同胞を組織することに力をそそいできたが、今度は中国で興士団をつくろういうのである。島山の興士団構想に共鳴した李光洙はその活動を手伝い、一九二〇年四月には興士団友となった。やがて李光洙はこの運動を朝鮮本土で実践することを考えるようになっていく。

「方略」は一九二〇年初頭の国務会議に提出され通過したが、実際にはほとんど実行できる状態ではなかった。独立運動は長期戦の様相を呈しはじめ、上海を離れて留学の途につく者も多くなった。三・一から時間がたち、ウィルソンの民族自決もパリの平和会議も朝鮮の独立とは何の関係もないことが明らかになるにつれて、独立の熱気は去っていった。そして厳しい政治の季節が到来する。臨政創立のとき警務局長となり最後には臨政を背負うことになった金九（キム・グ）は、自叙伝『白凡逸志』のなかで、この時期を次のように回想している。

「己未の年すなわち大韓民国元年のころには、国内、国外を問わず一致団結した精神で民族独立運動にのみ邁進していたものが、やがてそのころの世界思潮の影響を受けるにつれ、われわれの間にも、やれ『封建』だとか、やれ『無産革命』だとかいう言葉を使うものが現れてきて、単純だったわれわれの運動の戦線にも、思想の分裂、対立が生じるようになってきた。臨時政府職員の間にも、民族主義だ、共産主義だということで、公然と、また陰然

と内部闘争がはじまった。」(9)（梶村秀樹訳）

このような状況で、李光洙は民族運動の将来と自分自身の将来について煩悶するようになる。海外で独立運動をつづけるよりも、国内で民族の実力を養成する努力をしたほうがよいのではないかという思いにとらわれたのである。健康も悪化していた。ソウルにいる婚約者のことも気になったはずである。李光洙にとって三度目の上海での冬である一九二〇年の冬は、まちがいなく最悪の冬だった。

年があけて二月に、突然婚約者の許英粛が上海にやってきた。医者の免許をもつ彼女は、上海で開業して李光洙とともに暮らす決心でやってきたのである。だがすでに朝鮮に帰る決心をかためていた李光洙は、許英粛をそのまま本国に送り返し、彼自身も翌月には陸路で帰国する。

帰国途中日本の警察に逮捕されたものの不起訴処分になったため、朝鮮総督府との密約を疑われた李光洙は、自宅に蟄居しながら、この年の末に『民族改造論』を執筆し、翌一九二二年には興士団の国内版である修養同盟会を発足させる。彼は三十歳になっていた。

三　上海・一九九五年

1

筆者が投宿したのは、旧フランス租界にある花園飯店（ガーデンホテル）である。一九二六年にフランス商工会議所として作られた建物をそのまま玄関ホールとして利用し、後部に高層ビルの客室を建てましたこのホテルは、建物の外からみるとそれでも時代がかった玄関部分と後ろの高層建築との違いが目につくが、中に入れば七〇年前の建築物との合体であることなど気がつかないほど精巧にできている。内部の装飾は優美なアールデコ様式、前面

にはすばらしいフランス式庭園がある。ガーデンホテルという名前もそこに由来するのだろう。正月を海外ですごす日本人観光客がいっぱいで、聞こえてくるのは日本語ばかり、ホテルの中にある三越デパートで買い物をしていると、ここが中国であることを忘れるほどであった。租界に住むフランス商人の社交クラブとして使われていたころには、フランス語しか耳にしないところだったのだろう。因果な建物である。

茂名南路（マオミンナンルー）をへだてて東隣りの錦江飯店の名は、堀田善衛の「上海にて」の中に出てくる。

「ホテルの玄関に下り立って、私はぎょっとした。ホテルの名は、錦江飯店といった。錦江飯店とは何だったか。この今は主として外国人の客を迎えることになっているらしいホテルは、上海人にとって、かっては、上海で日本憲兵隊についで第二に恐ろしいところであった。人々はこの十四階建の建物を見上げて恐れおののいていた。それは長江デルタ地帯一帯を睥睨していた日本の十三軍司令部、別名登（ノボリ）部隊司令部ががんばっていたその建物であった。」(10)

堀田善衛が一九五七年、十一年ぶりに上海を訪れたときのことを書いた文章である。到着した夜、筆者も中を見ようとしてこのホテルのレストランで夕食をとったが、先入観のせいか、暗くて陰気な感じがした。

部屋の窓からは、李光洙が歩いたメイン・ストリート「霞飛路」（上海ではヤーフィロと発音すると、堀田は書いている）、フランス名アヴニュー・ドゥ・ジョッフル、現在の淮海中路（ワイハイチョンルー）が見下ろせた。淮海中路は若者むけの店が多く、上海の原宿といったところである。大型店舗や百貨店もあり、写真で見る昔の面影はない。茂名南路から淮海中路にでた交差点には地下鉄の駅がある。地下鉄は現在郊外から街の中心にむかってのびつつあるが、今のところここが終点だという。

そこから東に一本目の通りの南側が、臨時政府の第一回臨時議政院会議が開催された建物のある「金神父路」、

現在の瑞金二路（ロイチンアールー）である。『朝鮮独立運動の血史』におさめられた写真とよく似たフランス家屋がならんでいるが、写真に番地が明示されていないために建物の特定はできていない。いたるところで建物が崩れ、壊され、建てられており、発展する上海の活気が感じられる。だが旅行者の勝手な感想としては、歴史的な街をこのまま消滅させるのはじつに惜しい気がした。

瑞金二路を南に下って復興路（フーシンルー）に出て、そこから東に四、五百メートル行くと復興公園（フーシンコンユアン）がある。旧フランス租界にはこの他にも淮海公園や襄陽公園などがあり、どれが李光洙の散歩した「フランス公園」なのかわからないので、とりあえずこの復興公園に行ってみることにした。料金を払って中に入ると中国語と英語の案内板があり、ここは昔フランス公園と呼ばれていたと書いてあった。安心してゆっくりと中を散歩することにする。ウォータージェットコースターがあり、子供や若者たちの歓声があがっている。大きな樹木のしたのベンチにはお年寄りが休んでいる。ぼんやりとそれらを眺めながら、フランス人の子供たちを遊ばせる中国人の子守女を見ていた李光洙を想像してみた。

外套や帽子なしにふらりとスリッパ履きで出てこれそうなところは、地図でみると、この公園と重慶路（チョンチンルー）にはさまれた地域くらいしかなさそうである。してみると「白爾部路」とは現在の重慶路に違いないと考えながらその重慶路に出て愕然とした。高架道路を建設中であった。工事中のためますます殺伐として、昔の面影など望むべくもない道路を歩きながら、公園にはさまれた部分にある中国式集合住宅を見ていったが、中国語を知らない一人歩きの悲しさで、路地の奥に入り込む勇気がでない。あきらめて表通りを歩きながら、それらしい場所の写真を撮るにとどめた。

この通りから東にのびる自忠路（ツーチョンルー）を、淡水路（タンシュイルー）を越えてつぎの馬当路（マータンルー）まで歩き、そこで右に折れて少しいくと、韓国

人の名所になっている大韓民国臨時政府政庁跡がある。李光洙が去ったあと、政治抗争が続きますます窮状に陥った臨時政府は、金九らの努力で一九三二年まで上海に存続していたが、尹奉吉（ユン・ボンギル）の事件で日本警察に追われて上海から撤退した。この馬当路三〇六弄四号、旧馬浪路普慶里四号は、臨時政府が上海での最後の六年間おかれていた場所である。韓中国交回復ののち記念館となり、一九九二年には当時の大統領盧泰愚氏も訪れたそうで、現在は毎日大勢の韓国人観光客がバスで見学にきている。上海を訪れる韓国人観光客がかならず訪れる場所は、この臨政跡と尹奉吉の白川大将襲撃の場所である旧上海神社、現在の虹口公園（ホンキューコンユアン）（魯迅公園（ルーシュンコンユアン））である。

2

黄浦江が揚子江に合流する呉淞（ウースン）まで往復する遊覧船に乗ったのは、一月二日の午後だった。天気は悪く、今にも雨がふり出しそうである。ゆっくりと岸壁をはなれる船のデッキで、本を手にしながら外灘にならぶ壮麗な建築物のどれが李光洙の視野に入ったものかを確認していった。上海市人民政府が入っている重厚な新古典様式の建物は昔の香港上海滙豊銀行であるが、これは一九二三年に建てられたものなので、李光洙が『上海から』の中に書いた「中国大国の財政を心のままに操る滙豊銀行」の建物ではない。おそらく李光洙の二度目の滞在時に建築中だったと思われる。その左側のいくつかの建物は、李光洙がはじめてこの街に来たとき既に存在していたものだ。現在は周りの建物に比べて小さく見えるけれども、当時は最大級だったのではなかろうか。三角帽子の屋根がひときわ目立つ和平飯店北楼、その昔上海に君臨したサッスーン財閥の本拠地旧沙遜大厦は、一九二九年の建造物であるから李光洙の時代にはまだ存在していない。だがその左隣にある和平飯店南楼は、一九一三年の冬、まだ真新しい姿で李光洙を迎えたはずだ。

船がスピードを増すにつれて確認はむずかしくなった。あきらめて写真を何枚か撮り、ふと振りかえると、外灘の対岸浦東地区には工場らしい建物が林立し、はるか彼方には数多くの高層建築が霞んでいる。過去から未来へとページを一枚めくったような気分だった。上海はいまこの浦東地区に中心を移しつつある。上海市人民政府も現在新庁舎を浦東地区に建設中で、完成次第そちらに移るという。そのため現在入居しているあの旧香港上海銀行の建物は外国資本に売りに出しているということだ。香港上海銀行にも話しがもちかけられたが断ったという噂を最近耳にした。あそこにまた香港上海銀行が入っては、ブラックユーモアになってしまう。

両岸の交通機関は今のところフェリーが主役だが、近い将来は地下トンネルと橋が両岸をひとつにしてしまうことだろう。橋は去年完成した楊浦大橋を入れて現在二本、地下トンネルも二本ある。地図でみると、李光洙の青春時代の思い出の家がある通りを壊して建設中の高架道路は、どうやらこの地下トンネルへと続くらしい。また淮海中路まで来ている地下鉄も、やがては浦東地区まで達するはずだ。過去のさまざまな建造物を残した左岸と殺風景な工場街の浦東地区のあいだを流れる黄浦江を、巨大な楊浦大橋にむかって船は進んでいった。

3

今回の上海行きには、じつはもう一つの目的があった。それは、七十七歳になる父親といっしょに、若いころ父が訪れた場所を見ることである。小学校を出てすぐ本屋の丁稚奉公にでた父は、大陸への思いもあって、上海の内山書店に勤めるのを夢みたことがあるという。その夢はかなえられなかったが、のちに中国にある会社に入って上海に何度も出張し、そのたびに内山書店の近くのビルの会社借り上げの部屋に長期宿泊した。そのビルがまだ残っているかどうかを、二人で見にいくことにしたのである。

虹口（ホンキュー）地区の、今は中国人民銀行になっている旧内山書店から四川北路（スーチョンペイルー）を南に下り、かなり歩いたころ、父がこれだこれだと言ってあるビルの前に立ちどまった。少し黒ずんではいるが七階建てのしっかりした建物だ。一階と二階は事務所でそれより上は住居になっているらしく、洗濯物がみえた。なかなかたいした建物ではないかと思いながら、そのビルの終わる四つ角まできて、思わずあっと叫んでしまった。前から見るとそれなりに立派だが、横から見るとまるで一枚の壁のような薄っぺらな建物だったのだ。廊下をはさんで両側に部屋があるとも思えない薄さである。父に、向かいに部屋があったかどうか思い出せるかと尋ねると、そういえば道路に面した部屋と廊下しかなかったような気がするという。

少し離れたところから写真を撮りながら、昨日みた外灘の建造物と比較しないではいられなかった。ヨーロッパ文明の歴史の厚みを誇るかのようにどっしりと黄浦江を見下ろしていたあれらの建物と、前から見れば立派だが背後をもたない日本人地区のビル。まるで明治時代から前だけを見て走り続けていた当時の日本の姿をみる思いであった。

〔注〕

(1) 李光洙全集　又新社　一九七九　第6巻（以下全集と略記し、号数はアラビア数字で示す）三四九頁

(2) 全集9　一三一頁

(3) 同　一三二頁

(4) 一九三〇年「三千里」十号所載『上海あれこれ』　全集8　二四九頁

(5) 『上海から』は一九一四年十二月発行の「青春」第三号と翌一五年一月の第四号、『海参威に』は同年三月

発行の第六号に掲載された。ともに全集9所収

(6) 全集7二五四頁

(7) 同　二五五頁

(8) 同　二六〇頁

(9) 『白凡逸志—金九自叙伝』梶村秀樹訳注　平凡社東洋文庫　一九八六　二四四頁

(10) 『上海にて』堀田善衛著　筑摩叢書　一九六九　三七—八頁

(他の参考文献)

『アジアの都市と建築』加藤祐三編　鹿島出版会　一九九二

『上海—疾走する近代都市』　藤原恵洋　講談社現代新書　一九八八

『世界の大都市2上海』東京大学出版会　一九九〇

『新しい韓国近現代史』鄭在貞著　石渡延男他訳　桐書房　一九九三

『朝鮮独立運動の血史1・2』朴殷植著　姜徳相訳注　平凡社東洋文庫　一九八三

『大韓民国臨時政府在中国』沐涛・孙志科著　上海人民出版社　一九九二

『近代上海繁華録』唐振常主編　商務印書館国際有限公司　一九九四